

2K-29

特17
876

祝日大祭日略解

268
725

014125-000-1

特17-876

祝日大祭日略解

東浦 多意 / 刊

M44

ABB-0398



勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深
 厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美
 濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存
 ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レ
 ラ持シ師愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓發シ德器
 成就シ進テ公益ヲ廣ク世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ
 且緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ
 是レ如キニ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ
 遺風ノ顯彰スルニ足ラシ
 斯レ道ノ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ト俱ニ遵守ス
 ヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣
 民ト俱ニ拳々服膺シテ成其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ頼ラムコトヲ期ス願ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ泮礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

明治四十一年十月十三日

御名 御璽

祝日大祭日畧解

四方拜

一月一日

月一日は年の初の日でありますから何處の家でも門松を立て、標繩を張り、よい年を迎へた事を喜ばします。此日 天皇陛下は朝早く神嘉殿の前の御庭即ち清凉殿の東の御庭へ御出ましました。天地四方と山陵とを拜せられ、寶祚は長く榮わ世の中はよく治まり、五穀豊かに萬民も安心に暮せる様にと、御祈り遊ばします。此の御祭を四方拜と申します。式は午前四時に御掛の役人が出仕して、庭に屋を設け、中央に寶薦を敷き、机や燈臺を据ゑ、御座の周圍には屏風二雙を立て、準備致します。

二
をして午前五時半に、陛下親ら御祭を行はれるのであります。此事はいつ頃から始まったか明らかではありませぬが、光孝天皇の仁和五年に行はれた事が歴史に載つて居りますから、千餘年來引續いた御祭であります。

元始祭 一月三日

元始祭といふのは、天皇陛下親ら賢所の御祭を行はるゝ式で、明治五年に定められたものであります。賢所は内待所ともいひ、温明殿の中にあつて、三種の神器の一なる八咫の御鏡と、歴代天皇の皇霊とを奉安する所であります。

八咫の御鏡は、天照大神が天孫瓊々杵尊に、「これを見ること猶ほわれを見る如くせよ。」と宣はれて、八咫瓊曲玉と天叢雲劍とを添へて下されたものであります。斯様に貴い寶でありますから、御代々殿中に奉安して、大切に守られました。が、崇神天皇の御代に、御側では褻れ瀆すのを畏れて、別に神殿を設けて祭られました。是が賢所の始であります。八咫の御鏡は、恰も天照大神の御靈代とも申す寶でありますから、常々御祭を行はれ、朝廷や國の大事は、先づ賢所に奏せられる次第であります。

孝明天皇祭 一月二十日

孝明天皇は、今上天皇陛下の御父君で、仁孝天皇の御子であります。御名を統仁と申し奉り、弘化三年第百二十代の帝位に御即き遊ばされました。當時我國は、内は徳川幕府の威光衰へ、外は諸外國との關係があつ

で實に容易ならぬ有様でありました。天皇は天資聰明に渡らせ給ひ此の困難の間におはして、よい政治を敷いて、明治維新になる基を作られました。所が悲しくも慶應二年十二月二十五日病の爲に御崩れ遊ばしました。御年僅に三十六、在位二十一年であります。此崩御の日を太陽曆に換算して、一月三十日に其皇靈を祭られるのが、孝明天皇祭であります。此日は宮中で御親祭がある外、尙京都泉涌寺にある御陵にも勅使を立てられて、叮嚀な御祭典を行はせられます。

紀元節 二月十一日

四方拜、天長節と共に三大節の一つで、皇祖神武天皇即位の日を祭る日であり、あります。天皇が日向の高千穂の宮を發して、途々の賊を滅し、遂に大和

地方を平定して、橿原の宮に御位に御即き遊ばしたのは、今より二千五百七十二年前の一月一日でありました。之を太陽曆に換算すると、二月十一日に當るから、此日此御祭を行はれるのであります。一體我帝國は瓊々杵尊が天照大神の詔を受けて、日向國に御下り遊ばされて、其始を立てられたのであります。其御惠を受けて居た者は、僅に九州の一方に過ぎませんでした。國の基が堅く定められ、天下の萬民が總て皇室の御威光を仰ぐ様になつたのは、實に神武天皇の御即位からであります。されば此祭は我帝國の榮えん限り、幾千萬年の後までも續くべき、大切の御祭であります。

此日を祝祭日と定められたのは、明治五年で、其時は神武天皇即位日と申しましたが、明治六年に紀元節と改稱せられました。

春季皇靈祭

三月二十一日

秋季皇靈祭

九月二十三日

春季皇靈祭は春分の日、秋季皇靈祭は秋分の日、歴代天皇の皇靈を祀らるゝ御親祭であります。もと日で定められた祭ではありませぬから、年々一二日の相違があります。

申すも畏き事ではありますが、我々天皇陛下は御即位の當時から篤く皇祖皇宗を崇敬せられ、事ある時は先づ其の神靈に奉告して萬機を統治せられます。されば明治二年神殿を建立して、歴代祖宗の靈を祭られ、四年賢所に移し、奉り十二年には皇靈殿神殿御親祭の制を設けられ、また其の後常に御祭を缺かせられた事はなく、毎年春秋の二季に此大祭を行はせられます。

神武天皇祭

四月三日

神武天皇御名は神日本磐余彦火々出見尊と申し、鷓鴣草葺不合尊の第四子におはします。始め日向の高千穂宮に御出になりました。御年四十五の時天下の統一を思し召し、東征の途に上り給ひ、途々の賊を滅して大和に入り、畿内地方を従へられました。そこで辛酉の年大和の畝傍山の東南樞原に都を奠め、帝位に御即き遊ばしました。これが我國の紀元元年であります。其後御位におはす事七十六年、御年百二十七で御崩なされました。陵は大和の畝傍山の東北に在ります。御崩の日は太陰暦の三月十一日であります。が、太陽暦に換算して毎年四月三日に御祭を行はれます。此日は勅使を陵に遣されて、叮嚀な御祭を行はれ、陛下は御

親祭の式を行つて、遙拜せられます。此祭は近く萬延年間に始められたと云ひますが、紀元節と同じく我帝國のある限行はれる式であります。

天長節 十一月三日

天長節とは、今上天皇陛下の御誕生遊ばした日を祝ふので三大節の一であります。陛下は御名を、睦仁と申し上げ、孝明天皇第二の皇子はおはし、嘉永五年九月二十二日即ち太陽暦で十一月三日の御生であります。此日は我國の祭日の中で最もめでたい日であり、官中では御式の後、勅任官以上の方々や、各國の大使、公使などの御慶を受けられ、酒饌を下されます。又東京では、陛下が親臨遊ばして、盛なる觀兵式を行はれ、各兵營の所在地でも、矢張觀兵式を行ひます。申すも恐多い

次第であります。陛下は御年僅に十六歳で御位に御即きなされ、王政復古の大業を成就せられました。其後明治二十二年には大日本帝國憲法を發布して、我帝國の礎を固くし、翌二十三年には帝國議會を開かれて、立憲國たるの實を擧げられました。かくて明治二十七年には、清國と戦つて、大いに國の威光を高め、明治三十七八年には、露西亞に勝つて、東洋の平和を堅くし、更に朝鮮を併合して、其恩澤を及ぼす等、有難い御功績は、數へ盡せぬ程であります。殊に明治二十三年十月三十日、教育に關する勅語を賜はつて、我國道徳の根本を御示し下された事は、我々のいつまでも忘れてはならない事であり、我々は幸に、斯様な結構の御代に生れ合せたのであります。常に、勅語の御趣意を奉戴して、益々我國を盛にする様に心掛けねばなりません。

神嘗祭

十月十七日

毎年二月に、祈年祭といふのがあつて、太神宮を始め四方の神々に、其年の風雨順を得、五穀よくみのる様にと祈られます。そして秋の季になると新穀を捧げて、其御禮の祭を行います。之を神嘗祭と申します。嘗とは支那で秋祭に名づけた文字であります。古來九月十七日に行はれましたが、明治になつて十月十七日と定められました。祭典は祭主が司りましたが、明神宮に幣帛と生絹とを奉られ、宮中には御遙拜の式と賢所の御親祭とを行はれます。この祭は元正天皇の養老五年に始り、戦國時代以後一時中絶し、後光明天皇の御代に再興せられ、引續いて今日の制度になりました。

新嘗祭

十一月二十二日

新嘗祭とは、今年の新穀を神々に奉らせ、陛下親らもきこしめし給ふ祭であります。これは天皇御即位の年、大嘗祭を行はれる時にはありません。つまり大嘗祭と同じ質のものであります。御祭は神嘉殿で行はれるので、朝早く御掛りの方々が準備しますと、陛下御出まされた御告文を奉り、五穀の豊饒を御祈り遊ばします。式終つて皇族方並に多くの官人方に御宴を給はります。此祭はその起源極めて遠く神代に始まつて居りますが、定まつた例となりしたのは、用明天皇の二年からだと申します。初は中の卯の日を用ひましたが、明治になつて十一月二十

三日と定まりました。

祝日大祭日略解 終

明治四十四年十二月廿二日印刷

明治四十四年十二月廿五日發行

編輯者

甲府市柳町八十四番地

東 浦 多 意

印刷者

甲府市柳町八十四番地

東 浦 多 意

印刷所

甲府市柳町八十四番地

徵古堂印刷部工場

不許複製



